



## 平成28年度 [第20回] 文化庁メディア芸術祭

### アート部門

9月9日(金)まで作品募集中。

審査委員から届いたメッセージを  
ご紹介します。

<http://festival.j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(金)日本時間 18:00まで作品を募集しています。

アート部門には、テクノロジーとともに新たな価値観を探り、批評的な視点をもつ様々な表現が集います。審査委員には、画家・映像作家の石田尚志氏、視覚文化研究者の佐藤守弘氏、美術家の中ザワヒデキ氏、アーティストの藤本由紀夫氏の他、今年度からメディアアートキュレーター・東京都現代美術館学芸員の森山朋絵氏が新たに加わる予定です。

インタラクティブアート、メディアインスタレーション、映像作品、映像インスタレーション、グラフィックアート(デジタル写真を含む)、ネットアート、メディアパフォーマンス等、既存のジャンルを越境する意欲的な作品の応募をお待ちしています。

平成27年度 [第19回] 文化庁メディア芸術祭  
アート部門 優秀賞受賞作品

### 『(不)可能な子供、01:朝子とモリガの場合』

写真、ウェブ、映像、書籍

長谷川 愛 [日本]

実在する同性カップルの一部の遺伝情報からできうる  
子どもの遺伝データを生成し、  
それをもとに「家族写真」を制作した作品。



© Ai Hasegawa

※歴代受賞作品ウェブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) にて、これまでの受賞作品等をご覧いただけます。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

#### 広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内] 鎌倉・佐藤

Email: [jmaf20-pr@hilopress.net](mailto:jmaf20-pr@hilopress.net) Tel: 03-5577-4792 Fax: 03-6369-3596 ※受付時間: 平日10時~18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905



## 審査委員から届いたメッセージ



### 石田 尚志 (画家／映像作家／多摩美術大学准教授)

文化庁メディア芸術祭の審査をして、この賞の意義を痛感した。その多くが現代の先端的な技法や形式そのものの探求ではあるのだが、同時にどの仕事ももっとも古く、そして普遍的な対象と向き合おうとするものだったからだ。こうした表現の根幹への希求が、世界中から集まる作品に共通していることに、心打たれた。



### 佐藤 守弘 (視覚文化研究者／京都精華大学教授)

かつての科学者たちは、エーテルという媒質が宇宙空間に偏在し、光や電磁力を伝えていると考えていましたが、今日のメディア技術は、まるでエーテルのように私たちの環境のあらゆる細部に不可視のまま存在し、私たちのコミュニケーションを媒介しています。それは単なる道具ではなく、コミュニケーションそのものを変質させています。モダニズム以降のアートが考え続けてきたのがコミュニケーションにおけるメディアとは何であるかという問いであったとするならば、その問いは今日、どのようになされるのだろうか。応募される作品が、それを考えるきっかけになればと個人的に期待しています。



### 中ザワ ヒデキ (美術家)

メディア・アートとは何か。ただのアートとは違うのか。今日、メディアという接頭語なしに単にアートと称するなら、それは油彩や水彩のみならず、デジタル技術や身体技法、コンセプチュアルからワークショップまで、種々のメディアによる表現を幅広く含む。では第20回文化庁メディア芸術祭アート部門のレゾナードールとは何か。「メディアとは何か」を自問するアートの現在形の提示ではないか。

## ■審査委員プロフィール

### 石田 尚志 (画家／映像作家／多摩美術大学准教授)

1972年、東京都生まれ。多摩美術大学准教授。90年より本格的な絵画制作、92年頃より映像制作を始める。絵画制作のプロセスである「絵を描く」という行為そのものに着目し、それを映像メディアによって「動く絵」として作品に昇華させる、画家／映像作家。近年の主な展覧会に「MOTコレクション 特集展示 石田尚志」(東京都現代美術館、2011)、「ダブル・ヴィジョンー日本現代美術展」(モスクワ市近代美術館ほか、2012)、「Distilling Senses: A Journey through Art and Technology in Asian Contemporary Art」(香港アートセンター、2013)、「石田尚志 渦まく光 Billowing Light: ISHIDA Takashi」(横浜美術館、沖縄県立博物館・美術館、2015)など。五島記念文化賞美術新人賞受賞(2007)。

### 佐藤 守弘 (視覚文化研究者／京都精華大学教授)

1966年、京都府生まれ。コロンビア大学大学院修士課程修了。同志社大学大学院博士後期課程退学。博士(芸術学)。芸術学・視覚文化論専攻。著書に『トポグラフィの日本近代ー江戸泥絵・横浜写真・芸術写真』(青弓社、2011)など。最近の論文に「産業資本主義の画像＝言語ー写真アーカイヴとセキュラ」(『PARASOPHIA京都国際現代芸術祭2015[公式カタログ]』、2015)、「キッチュとモダニティーー権田保之助と民衆娯楽としての浪花節」(『大正イマジリィ』11、2016)など。翻訳にジェフリー・バッチェン『写真のアルケオロジー』(共訳、青弓社、2010)など。第62回芸術選奨文部科学大臣新人賞(評論等部門)受賞。



### 中ザワ ヒデキ (美術家)

1963年、新潟県生まれ。千葉大学医学部在学中の83年よりアーティスト活動を開始(第一期:アクリル画)。卒業後眼科医となるも90年、絵筆をコンピューターのマウスに持ち替えイラストレーターに転身(第二期:バカCG)。97年、CGの画素を文字等の記号に置き換え純粋美術家に転身(第三期:方法絵画)。2004年、方法主義では禁じていた色彩を再び使用し、以後多彩に活動(第四期:本格絵画、新・方法ほか)。宣言「方法主義宣言」「新・方法主義宣言」。特許「三次元グラフィックス編集装置」「造形装置および方法」。著書『近代美術史テキスト』『西洋画人列伝』『現代美術史日本篇1945-2014』。CD『中ザワヒデキ音楽作品集』。95年度マルチメディアグランプリMMAアーティスト賞。VOCA2003奨励賞。16年より人工知能美学芸術研究会発起人代表。

### 藤本 由紀夫 (アーティスト)

1950年、愛知県生まれ。大阪芸術大学音楽学科卒業。主な個展に97年から2006年まで10年間毎年1日のみ開催された展覧会「美術館の遠足」(西宮市大谷記念美術館)、「四次元の読書」(CCGA現代グラフィックアートセンター、2001)、「ここ、そして、そこ」(名古屋市美術館、2006)、「ECHOー潜在的音響」(広島市現代美術館、2007)、「哲学的玩具」(西宮市大谷記念美術館、2007)、「+/-」(国立国際美術館、2007)、「関係」(和歌山県立近代美術館、2007)など。主なグループ展に第49回ベネチア・ビエンナーレ(2001)、第52回ベネチア・ビエンナーレ(2007)など。80年代半ばより日常のなかの「音」に着目した装置、サウンド・オブジェを制作。インスタレーションやパフォーマンス、ワークショップを通じて、空間における「音」の体験から新たな認識へと開かれていくような活動を展開している。

### 森山 朋絵 (メディアアートキュレーター/東京都現代美術館学芸員)

筑波大学大学院在学中の1989年より学芸員として東京都写真美術館・映像工夫館の創立に携わる。東京大学大学院、早稲田大学、バウハウス大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)ほかで教鞭を執りつつ、国内外で約50本のメディアアート展を企画。2007年より現職。文化庁派遣によりZKM、MITメディアラボに滞在し、J.P.Getty研究所コンサルティングキュレーター、アルスエレクトロニカ・グランプリ審査員、SIGGRAPH Asia 2008(シンガポール)にて日本人初のArt Gallery / Emerging Technologies議長、NHK日本賞審査員などを歴任。文化審議会専門部会委員などの活動を通して、メディア芸術拠点としての公立文化施設の成立と展開、テクノロジーと芸術の協働や展示支援をテーマに研究と実践を行う。主な企画展に「イメージーションの表現」「絵コンテの宇宙」「超[メタ]ビジュアル」「文学の触覚」「名和晃平ーシンセシス」「吉岡徳仁ークリスタライズ」「ミッション[宇宙×芸術]」、文化庁メディア芸術祭海外メディア芸術祭等参加事業(オーストリア・リンツ市)、文化庁メディア芸術祭愛知展「CODE」(愛・地球博記念公園 地球市民交流センター)。主な著作に『映像体験ミュージアム』『Meta-Visual (French Edition)』(共著・監修)など。



## ■選考委員

### アート部門

田所 淳 (クリエイティブ・コーダー)

西川 美穂子 (東京都現代美術館学芸員)

服部 浩之 (キュレーター)

福原 志保 (アーティスト/研究者/Google ATAP テキスタイル開発兼クリエイティブリード)

藤川 悠 (茅ヶ崎市美術館学芸員)

水野 勝仁 (甲南女子大学文学部メディア表現学科講師)

## ■アート部門 募集概要

インタラクティブアート、メディアインスタレーション、映像作品、映像インスタレーション、グラフィックアート (デジタル写真を含む)、ネットアート、メディアパフォーマンス等

**募集期間 2016年7月7日(木)～9月9日(金) 日本時間 18:00 必着**

**応募条件** ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

- 2015年9月10日(木)から2016年9月9日(金)までの間に完成または、すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

- 応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・第20回文化庁メディア芸術祭ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、同意の上でご応募ください。

**各 賞** 高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

### メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円

優秀賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新人賞：賞状、トロフィー、副賞20万円

功労賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。



# 平成28年度 [第20回] 文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門 9月9日(金)まで作品募集中。 審査委員から届いたメッセージを ご紹介します。

<http://festival.j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(金) 日本時間 18:00まで作品を募集しています。

エンターテインメント部門には、遊びや体験をつくりだす多種多様な形式の作品が集います。審査委員には、青森県立美術館学芸員の工藤健志氏、デザイナー・クリエイティブディレクターの東泉一郎氏、ゲームデザイナーの米光一成氏の他、今年度から、ゲームクリエイターの遠藤雅伸氏、アートディレクターの佐藤直樹氏が新たに加わりました。ゲーム作品やミュージックビデオ、自主制作・広告映像、ガジェット、ウェブプロモーション、オープンソースプロジェクト、アプリケーション等、創意あふれる作品の応募をお待ちしています。

平成27年度 [第19回] 文化庁メディア芸術祭  
エンターテインメント部門 優秀賞受賞作品

## 『Thumper』

ゲーム

Marc FLURY / Brian GIBSON [米国]

従来のリズム・アクション・ゲームにスピード感と  
身体感覚を結合させた  
「リズム・バイオレンス・ゲーム」。



©2015 Drool LLC

※歴代受賞作品ウェブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) にて、これまでの受賞作品等をご覧いただけます。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

### 広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内] 鎌倉・佐藤

Email: [jmaf20-pr@hilopress.net](mailto:jmaf20-pr@hilopress.net) Tel: 03-5577-4792 Fax: 03-6369-3596 ※受付時間: 平日10時~18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905



## 審査委員から届いたメッセージ



### 遠藤 雅伸(ゲームクリエイター/東京工芸大学教授)

文化庁メディア芸術祭のエンターテインメント部門は、壮大な技術の無駄遣いか、クレイジーなコンセプトの強引な実現にあると遠藤は信じています。日本人は未来に生きているな、と世界中から揶揄されても、いずれはそれが新しいスタンダードとして理解されることでしょう。今までにない体験を、今までできないと思われていたことの実現を、新たな様式美として臆することなく披露してください。



### 工藤 健志(青森県立美術館学芸員)

「エンタメ」という器に盛り付けられた時代の精神と人々の嗜好。驚きのテクノロジーで調理され、表層的な感覚に訴える口当たりの良さに、流行という魔法のスパイスをまぶせば一丁上がり?否。反知性、未成熟に媚びず、社会や人の意識に対する衝突や不和があってもいい。表現としてのリベラリズムをどこまでも追及したもの。思考の尺度を拡張するもの。これからの世界のありようを徹底的に問うたもの。そんな作品を僕は味わってみたい。

## ■審査委員プロフィール

### 遠藤 雅伸(ゲームクリエイター/東京工芸大学教授)

1980年代よりアーケードゲーム、家庭用ゲーム、PCゲーム、カードゲーム、携帯電話アプリゲーム、スマートフォンアプリゲームなど、あらゆる分野でジャンルに囚われず多くの作品を制作してきた日本ゲームの作家の草分け。現在はゲームに関する教材の考案などに力を入れ、後進クリエイターの育成に努めるとともに、日本におけるゲーム研究の牽引役として活動している。

### 工藤 健志(青森県立美術館学芸員)

1967年生まれ。青森県立美術館には準備室時代から在籍。専門は戦後日本美術。「美術」の枠組みや「展覧会」の制度を問い直す企画を多数手がけている。主な担当展に、「立石大河 1963-1993」(1994)、「山本作兵衛展」(1996)、「縄文と現代」(2007)、「寺山修司◎劇場美術館」(2008)、「ラブラブショー」(2009)、「Art and Air」(2012)、「成田亨 美術/特撮/怪獣」(2015)など。「造形集団 海洋堂の軌跡」(2004-、水戸芸術館、台北市立美術館ほか)、「ボックスアート」(2006-、静岡県立美術館ほか)といった巡回展のキュレーションも担当。近年は静岡県立美術館・村上敬、島根県立石見美術館・川西由里と3名で視覚文化研究を行なう「トリメガ研究所」を結成し、「ロボットと美術」(2010)、「美少女の美術史」(2014)の2本の展覧会を開催した。編著に『青森県立美術館コンセプトブック』(スペースシャワーボックス、2014)など。

### 佐藤 直樹(アートディレクター/多摩美術大学教授)

1961年、東京都生まれ。北海道教育大学卒業後、信州大学で教育社会学・言語社会学を学ぶ。美学校菊畑茂久馬絵画教場修了。94年、『WIRED』日本版創刊にあたりアートディレクターに就任。98年、アジール・デザイン(現Asyl)設立。2003~10年、アート・デザイン・建築の複合イベント「セントラルイースト東京(CET)」プロデュース。10年、アートセンター「アーツ千代田3331」立ち上げに参画。サンフランシスコ近代美術館パーマネントコレクションほか国内外で受賞多数。個人展示として、「そこで生えている。」(Trans Arts Tokyo 2013~/大館・北秋田芸術祭2014)ほか。美学校「絵と美と画と術」講師。



### 東泉 一郎 (デザイナー／クリエイティブディレクター)

東京に生まれ、理工学を学んだのち、デザイナーに。「はじめてつくるものをつくる」ために働く。速いもの高いところ好き。さまざまな表現領域と、デザイン、サイエンス、エンジニアリングなどのあいだを翻訳・橋渡ししつつ、ものづくりやイノベーションに取り組む。1997年アルスエレクトロニカにおいてネットワーク部門ゴールデン・ニカを受賞した『Sensorium project』のディレクターとして、国内外各地で実験的インスタレーションを行なうほか、日本科学未来館『インターネット物理モデル』、2002 FIFA World Cupのための演出コンセプトワーク、KDDI「AU design project」コンセプトモデル、JAXA「moonbell」プロジェクト、ロボットをベースにしたフィジカルインターフェース開発など、ストリート・音楽・ダンス・映像などに根ざした表現から、先端的研究開発まで、大小を問わずコミュニケーションをデザインしている。

### 米光 一成 (ゲームデザイナー)

1964年生まれ。ゲーム作家、ライター。『ぶよぶよ』『想像と言葉』『BAROQUE』『King of Wands』など多数のゲーム企画・脚本・監督を手掛ける。新作ゲームは『想像と言葉』。著書に『思考ツールとしてのタロット』(Kindle版)、『自分だけにしか思いつかないアイデアを見つける方法』(日本経済新聞出版社)、『仕事を100倍楽しくするプロジェクト攻略本』(KKベストセラーズ)など。公開句会「東京マッハ」メンバー。宣伝会議「編集・ライター養成講座 上級コース」の専任講師、池袋コミュニティ・カレッジ「表現道場」講師を務める。



## ■エンターテインメント部門 募集概要

ゲーム(テレビゲーム、オンラインゲーム等)、映像・音響作品(ミュージックビデオ、自主制作・広告映像等)、空間表現(特殊映像効果・演出、パフォーマンスを含む)、ガジェット(プロダクト、ツールを含む)、ウェブ(ウェブプロモーション、オープンソースプロジェクトを含む)、アプリケーション等

**募集期間 2016年7月7日(木)～9月9日(金) 日本時間 18:00 必着**

**応募条件** ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

2015年9月10日(木)から2016年9月9日(金)までの間に完成または、すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・第20回文化庁メディア芸術祭ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、同意の上でご応募ください。

**各 賞** 高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

**メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)**

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円

優秀賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新人賞：賞状、トロフィー、副賞20万円

功労賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。





## 平成28年度 [第20回] 文化庁メディア芸術祭

### アニメーション部門

9月9日(金)まで作品募集中。

審査委員から届いたメッセージを  
ご紹介します。

<http://festival.j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(金) 日本時間 18:00まで作品を募集しています。

アニメーション部門には、豊かな物語性や個性的な表現力をもった、完成度とオリジナリティを極めた作品が集います。審査委員は、アニメーション監督の高橋良輔氏の他、今年度からアニメーション作家の木船徳光氏、映像作家・CGアーティストの森野和馬氏が新たに加わりました。劇場アニメーション、短編アニメーション、テレビアニメーション、オリジナルビデオアニメーション(OVA)等、手描きによる作画からフル3DCG、それらを融合させた技法まで幅広い作品の応募をお待ちしています。

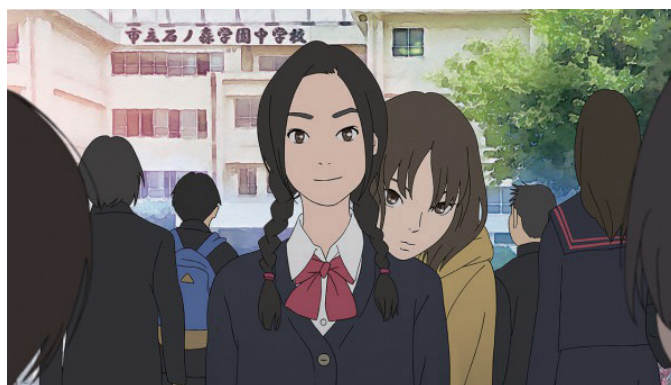
平成27年度 [第19回] 文化庁メディア芸術祭  
アニメーション部門 優秀賞受賞作品

### 『花とアリス殺人事件』

劇場アニメーション

岩井 俊二 [日本]

実写映画のづくり手として広く知られる作者の  
初の劇場用長編アニメーション作品。



©2015 "the case of hana & alice" Film Partners

※歴代受賞作品ウェブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) にて、これまでの受賞作品等をご覧いただけます。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

#### 広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内] 鎌倉・佐藤

Email: [jmaf20-pr@hilopress.net](mailto:jmaf20-pr@hilopress.net) Tel: 03-5577-4792 Fax: 03-6369-3596 ※受付時間: 平日10時~18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905



## 審査委員から届いたメッセージ



### 木船 徳光 (アニメーション作家 / IKIF+代表 / 東京造形大学教授)

数あるフェスティバルの中で一番多様なジャンルのアニメーション作品が集まってくるのがこのフェスティバルです。学生やプロが制作したものも、自主制作も商業作品も、手描きアニメーションも3DCGも、様々な作品が分け隔たりなく集まってきます。多様な価値観のもとで制作された素晴らしい作品に出会えることを、なにより楽しみにしています。



### 森野 和馬 (映像作家 / CGアーティスト)

どんなに動きそうにないものでも、命を吹き込む力を持つ、『アニメーション』という特別な世界。そこに「今見るべきもの」、「今つくるべきもの」、「時代を超越したもの」という視点が加わることで、この世界が持つ芸術としての魅力を最大限に引き出すのではないかと、考えます。心に響くような作品に出会えるのを楽しみにしています。

## ■審査委員プロフィール

### 木船 徳光 (アニメーション作家 / IKIF+代表 / 東京造形大学教授)

1959年、神奈川県生まれ。東京造形大学造形学部美術学科卒業(絵画専攻)。2001年、東京造形大学着任。1979年木船園子とIKIFというユニットを組みアニメーションの制作を始め、実験アニメーションや映像インスタレーションなどの制作発表を続ける。80年代終盤より、CGアニメーション制作に携わるようになり、97年にIKIF+を設立。以後『メトロポリス』『イノセンス』『スチームボーイ』『スカイ・クロラ』等、様々なアニメーション作品の3DCG制作に参加。NHK教育プチプチ・アニメ『ぶーばーがー』(1995-97)、『BLOOD THE LAST VAMPIRE』(3D監督、2000)、『立喰師列伝』(3D監督、2006)、『映画ドラえもん』(OPアニメーション制作・3DCG監督・スーパーバイザー、2007-2009)。日本アニメーション協会監事、インターカレッジアニメーションフェスティバル(ICAF)実行委員。日本アニメーション学会、日本映像学会、国際アニメーションフィルム協会(ASIFA)会員。

### 高橋 良輔 (アニメーション監督)

1943年、東京都生まれ。64年、株式会社虫プロダクションに入社、テレビアニメーション創世期に演出として各種作品にあたる。虫プロダクションを退社後、株式会社サンライズ創業期にSF作品『ゼロテスター』を監督し、その後の同社の方向を決める。代表作として『太陽の牙ダグラム』(原作・監督、1981)、『装甲騎兵ボトムズ』(原作・監督、1983)がある。ほかに手塚プロダクション『火の鳥』(監督、2004)、NHK『モリゾーとキッコロ』(監督、2004)、アニプレックス『FLAG』(原作・総監督、2006)、サンライズ『幕末機関説 いろはにほへと』(原作・総監督、2006)、WOWOW開局20年記念番組『オズマ』(総監督、2012)などがある。近年は大阪芸術大学にて教授として後進の指導にもあたっている。



### 森野 和馬 (映像作家 / CGアーティスト)

1966年、静岡県生まれ。株式会社ストライプファクトリー代表。多摩美術大学非常勤講師。世界最高峰のCG学会SIGGRAPHにおいて、93年から現在までにアート作品、CM等の商業作品で10本の作品で入賞を果たす。Prix ARS ELECTRONICA ,Imaginaなど海外の受賞多数。東京都写真美術館、東京都現代美術館をはじめ、様々な企画展に参加し、国内外で精力的に活動している。また一方でCMディレクターとしても活躍。東芝、サントリー、日テレなどのモーショングラフィックスも手がける。ほかに愛知万博「瀬戸日本館」1階の総合ディレクター、KENISHIIや井上陽水のプロモーションビデオ、ライブVJとしても注目を集める。2015年3D作品の個展「PINK SKIN」開催。

他



## ■アニメーション部門 募集概要

劇場アニメーション、短編アニメーション、テレビアニメーション、オリジナルビデオアニメーション(OVA)等

**募集期間 2016年7月7日(木)～9月9日(金)日本時間 18:00 必着**

**応募条件** ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

- 2015年9月10日(木)から2016年9月9日(金)までの間に完成または、  
すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

- 応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・第20回文化庁メディア芸術祭ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、  
同意の上でご応募ください。

**各 賞** 高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

### メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円

優秀賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新人賞：賞状、トロフィー、副賞20万円

功労賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。



## 平成28年度 [第20回] 文化庁メディア芸術祭

### マンガ部門

9月9日(金)まで作品募集中。

審査委員から届いたメッセージを  
ご紹介します。

<http://festival.j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(金) 日本時間 18:00まで作品を募集しています。

マンガ部門には、ネットや電子媒体による発表形態の多様化に伴い、マンガの可能性を拡張するような作品が多く集まります。審査委員は、マンガ家の犬木加奈子氏、松田洋子氏、マンガライターの門倉紫麻氏、文学者の古永真一氏等です。単行本で発行されたマンガ、雑誌等に掲載されたマンガ、ネット上で発表されたマンガ、同人誌等の自主制作のマンガ等、世界に届くパワーあふれる作品の応募をお待ちしています。

平成27年度 [第19回] 文化庁メディア芸術祭

マンガ部門 優秀賞受賞作品

#### 『淡島百景』

志村 貴子 [日本]

透明感あふれる絵柄と心理描写から、  
登場人物の内面が繊細に紡ぎだされた作品。



©Takako Shimura 2015

※歴代受賞作品ウェブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) にて、これまでの受賞作品等をご覧いただけます。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

#### 広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内] 鎌倉・佐藤

Email: [jmaf20-pr@hilopress.net](mailto:jmaf20-pr@hilopress.net) Tel: 03-5577-4792 Fax: 03-6369-3596 ※受付時間: 平日10時~18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905



## 審査委員から届いたメッセージ



### 犬木 加奈子 (マンガ家/大阪芸術大学客員教授)

「マンガは何々でなければいけない」というモノは無いのです。

求めるのは読者を感動させ面白いと思わせるモノ。面白いとはなんなのか、次の大きなウェーブを作り出す作品を期待しているのです。



### 門倉 紫麻 (マンガライター)

メディア芸術祭「っぽい」かどうかは忘れていただいて、これぞと思われる自信作を、ぜひお送りください。

ご応募いただいた1作1作を審査委員一同、真剣に拝読いたします。個人的には、紙媒体、電子媒体、それぞれの媒体における表現を追求した作品が読めることを、期待しております！

### 松田 洋子 (マンガ家)

マンガのおもしろさというのは、作者らしさが出たところにあると思います。

その作家にしか描けない人物の微妙な表情が魅力的だったり、その作家にしか思いつかないようなセリフが突き刺さったりします。

そんな自分しか描けないマンガのご応募、お待ちしております。

## ■審査委員プロフィール

### 犬木 加奈子 (マンガ家/大阪芸術大学客員教授)

1958年、北海道生まれ。87年に講談社『少女フレンド』増刊号にてデビュー。89年、講談社『サスペンス&ホラー』創刊時より雑誌表紙、巻頭を描き続け、代表作『不思議のたたりちゃん』(講談社、1992-)などを発表。92年には秋田書店、ぶんか社、リイド社、角川書店をはじめホラーマンガ誌が創刊され、それらすべての雑誌表紙、巻頭を担当。また作品がOVA化される。これまでに犬木加奈子漫画賞をはじめ、ホラー誌の選考委員や、漫画の日選考委員、日本漫画家協会賞選考委員を務める。2001年には、第一回日中民間文化交流に参加し北京の中国美術館で作品を展示。08年より大阪芸術大学客員教授。11年にはフランス、13年には銀座のギャラリーなどで展示を行なう。14年4月より東京藝術大学で講師を務める。16年、日本大学芸術学部芸術資料館にて「ホラー漫画家 犬木加奈子の世界」展を開催。

### 門倉 紫麻 (マンガライター)

1970年、神奈川県生まれ。Amazon.co.jpエディターを経て、2003年よりフリーライターに。『ダ・ヴィンチ』『モーニング』『レタスクラブ』などで、主に漫画に関する記事の企画・執筆、マンガ家へのインタビュー、コラム連載などを行なう。著書に『週刊少年ジャンプ』で作家の仕事術を取材した『マンガ脳の鍛えかた』(集英社、2010)、宇宙飛行士、宇宙開発関係者に取材した『We are 宇宙兄弟 宇宙を舞台に活躍する人たち』『We are 宇宙兄弟 宇宙飛行士の底力』(モーニング編集部編・講談社+α新書、ともに2012)。またフランスにて、日本のマンガ業界用語を網羅したフランス人マンガファン向けの語学書『LE JAPONAIS DU MANGA』(Misato RAILLARDとの共著、ASSIMIL、2015)を出版。



### 古永 真一 (文学者 / 首都大学東京准教授)

1967年生まれ。パリ第七大学留学を経て早稲田大学文学研究科博士後期課程修了。首都大学東京准教授(表象文化論)。著書に『ジョルジュ・バタイユ—供犠のヴィジョン』(早稲田大学出版部、2010)、『BD—第九の芸術』(未知谷、2010)、訳書にバタイユ『聖なる陰謀—アセファル資料集』(共訳、ちくま学芸文庫、2006)、ティエリ・グルンステン『線が顔になるとき—バンドデシネとグラフィックアート』(人文書院、2008)、パスカル・ラバテ『イビクス—ネヴローゾフの数奇な運命』(国書刊行会、2010)、フランソワ・スクイテン+ブノワ・ペータース『闇の国々』(共訳、小学館集英社プロダクション、2011)、セバスチャン・ロファ『アニメとプロバガンダ』(共訳、法政大学出版局、2011)、フランソワ・スクイテン『ラ・ドゥース』(小学館集英社プロダクション、2013)、セルジオ・トッピ『シェヘラザード—千夜一夜物語』(小学館集英社プロダクション、2013)、マルク=アントワヌ・マチュー『神様降臨』(河出書房新社、2013)、グルンステン=ペータース『テプフェール—マンガの発明』(共訳、法政大学出版局、2014)ほか。

### 松田 洋子 (マンガ家)

1964年、大阪府生まれ、広島県育ち。高校卒業後上京、30歳で漫画家を志す。初めて描いた作品『薫の秘話』が第27回ちばてつや賞大賞を受賞し、95年『モーニング』でデビューする。以降、『秘密の花園結社 リスペクター』『まほおつかいミミッチ』『相羽奈美の犬』などの作品を幅広い作風と媒体で発表し、『赤い文化住宅の初子』は、2007年にタナダユキ監督により実写映画化される。『ママゴト』は、平成23年度[第15回]・平成24年度[第16回]文化庁メディア芸術祭の審査委員会推薦作品、および第42回日本漫画家協会賞優秀賞受賞。

他



## ■マンガ部門 募集概要

単行本で発行されたマンガ、雑誌等に掲載されたマンガ（連載中の作品を含む）、コンピュータや携帯情報端末等で閲覧可能なマンガ、同人誌等の自主制作のマンガ等

**募集期間 2016年7月7日(木)～9月9日(金) 日本時間 18:00 必着**

**応募条件** ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

2015年9月10日(木)から2016年9月9日(金)までの間に完成または、  
すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・第20回文化庁メディア芸術祭ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、同意の上でご応募ください。

**各 賞** 高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

**メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)**

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円

優秀賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新人賞：賞状、トロフィー、副賞20万円

功労賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。





## 平成28年度 [第20回] 文化庁メディア芸術祭 開催概要

作品募集	2016年7月7日(木)～9月9日(金) 日本時間 18:00 必着
受賞発表	2017年3月中旬予定
贈呈式	2017年夏～秋 開催予定
受賞作品展	2017年夏～秋 開催予定 ※日程、会場等につきましては決まり次第、随時お知らせいたします。

文化庁メディア芸術祭  
総合ウェブサイト <http://j-mediaarts.jp>

第20回  
文化庁メディア芸術祭  
ウェブサイト <http://festival.j-mediaarts.jp>

Facebook <http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>

Twitter @JMediaArtsFes

主催 文化庁メディア芸術祭実行委員会

問合せ先 文化庁メディア芸術祭事務局 [CG-ARTS内]

E-mail: [jmaf@cgarts.or.jp](mailto:jmaf@cgarts.or.jp)

Tel: 03-3535-3501 ※受付時間: 平日 10:00-18:00

※各事業の詳細は、文化庁ウェブサイト (<http://www.bunka.go.jp>) にてご確認ください。

## スケジュール Schedule 20周年は2度楽しい?! 詳しくは メ芸で検索



第20回  
文化庁  
メディア芸術祭

2016年

2017年

7

9

10

2

3

(第20回 文化庁メディア芸術祭 スケジュール 20th Japan Media Arts Festival Schedule)

**募集期間**

Entry Period  
2016.7.7-9.9

**審査期間**

Judging and Selection  
2016.9-2017.2

**受賞発表**

Announcement of Award-winning Works  
2017.3 中旬 (Mid-March)

**受賞作品展**

Exhibition of Award-winning Works  
2017.夏-秋 (予定) Summer / Autumn (TBC)

(20周年企画展 スケジュール 20th Anniversary Exhibition Schedule) ※20周年を記念した企画展を実施します。

**20周年企画展** 20th Anniversary Exhibition

会場: アーツ千代田 3331 他 Venues: 3331 Arts Chiyoda and other locations.  
2016.10.15-11.6



文化庁  
メディア芸術祭  
20周年企画展  
変える力